

医学図書館のシンギュラリティ

顕微解剖 中村 桂一郎

シンギュラリティをご存じでしょうか。やがて AI（人工知能）が人類の英智を超える日が来るということによって話題になっている用語です。つい最近、自動診断結果の責任は誰が負うか、ということがニュースになりました。技術的特異点と訳されるとさらに意味不明となってしまうがちですが、最近の囲碁将棋や自動運転の世界、また、Siri 等の音声認識技術の発達をみると、冗談では済まされません。機械学習、ディープラーニングの発展に裏付けされた AI は、高度なデータ処理ばかりでなく、解析の対象となるデータベース、つまり、ビッグデータを構築してしまうのです。図書・文献情報は、いわばこのようなビッグデータの老舗です。

最近、論文のオープンアクセス（OA）化が進み、OA を謳った雑誌が増えています。しかし、無償で公開される学術論文数はまだまだ少なく、大学図書館は出版社と契約して、学内の研究者が自由に論文を読むことができるよう陰の力となっています。医学図書館は、電子ジャーナル（EJ）化が進んでいることで評価されています。EJ 化により、研究者は自室の PC から気持ちよく文献検索することができ、図書館に足を運ぶ必要がなくなりました。図書館としてはやや寂しい状況ですが、それにより図書館の情報収集という役割は大いに効率化・強化されました。しかし、そこに支払われる経費は生半可なものではなく、このままでは自由に閲覧できる雑誌数を制限せざるを得なくなりそうなのです。

昨年 6 月の週刊ダイヤモンドの統計で、久留米大学医学部の医師一人当たり臨床論文数は、私立医系大学の中で第 3 位と報告されました。研究者の意欲・活動を表しているといっても過言ではないでしょう。文献検索の容易な環境がこの意欲をかき立てる一要因であるとは言えないでしょうか。この効果をさらに高めるために、最も有効な方法を模索していかなければなりません。

もう 2 年、私が医学図書分館長を務めさせていただくこととなりました。さまざまな局面において経費節減が求められる世相を反映して、今期は EJ 契約の問題に取り組みねばならないようです。シンギュラリティはすぐそこです。そのとき、我々はどうするのか、なにができるのか。この命題にまだ答えはありません。ヒトの英智をさらに引き出すために、大学の顔、学術・文化の象徴である図書館を、皆でさらに使いやすい場に変えていこうではありませんか。さらなる充実・発展のために、どうぞご意見をお寄せください。